

あまでうす

プロローグ
あまでうす

（木曾路はすべて山の中である・・・岨づたいに行く崖の道・・・数十間の深さに臨む木曾川の道・・・山の尾をめぐる谷の入り口・・・）と、島崎藤村は小説『夜明け前』の冒頭で書いているが、その風景を遙かに上回る断崖絶壁の溪谷に囲まれた、異空間といっても過言ではない秘境の地に、隠れ宿があると

という。それでもピーターが絶えないうと推測するしかなうと推測するしかなう。と言いついで、思い立ったが吉日、車で移動していることが多き日常茶飯、たまには気分転換を兼ねて、旅に出るには目に青葉と新緑の眩しいちようどいい季節、友達とふたり泊2日の旅を、JR高山本線を走る特急ワイドビュー飛騨に岐阜駅から乗り込み、この旅でどんな魑魅魍魎に遭遇することが出来るのか期待をしつつ、かるやかに北上して行ったのであった。3ヶ月前のこと、もう10年来の付き合いの4歳年上の友人

が「噂どおり妖の宿だったよ。漆黒の闇の怖さがある。それだけじゃない・・・まあ、一度泊まってみる価値はあるな」と、あの宿に泊まったときの感想を言った。「それだけじゃない」の、後の妙な間が気になり、怪訝の思いで訊いてみた。「・・・何かが出るんだろう・・・違うか？」すると友人は「そこは、百聞は一見にしかず。まずは、行ってそれを確かめてみる」といい。お前が書いてる小説のネタになると思うぜ。痛きた。最近では、もっぱらエッセイばかりを書いているが、短編小説『あやかし』シリーズとして、今までに第12章まで書き、このところ1パーセントの閃きもなく、スランプ状態

でいるのが現状である。それも相まって、友人の勧めと妖好きのぼくとしては『妖の宿』というネーミングにも惹かれ、これは何がなくとも行かねばなるまいと、さっそく悪友である正美に声をかけた。この正美というのは、会社の同僚であり、歴史好きで特に奈良の歴史に詳しい後輩である。ちなみに、ぼくはというと、奈良よりも京都の歴史に興味がある。社内でお互い仕事より歴史に付いて話しをする事が多く、徐々に意気投合し、奈良や京都にたびたび出かけて行くようになった間柄である。また、正美は歴史だけではなく、妖に関連する話題も滅法好む男である。正美の家

とき、本棚に『妖怪百景』、『あやかし百物語』、妖怪マンガ『妖怪になにかようかい』全20巻。などの妖怪本が、びっしりと壁を埋め、さしずめ異世界の建築物かと思つたほどであつた。それを、ためつすがめつ眺めながら「妖怪本のスペシャリストと皮肉交じりに言つたつもりだったが、なにが功を奏すか分からぬもので、「どこぞかで、妖怪が出る噂を聞いたら教えてちょうよ。えか」と言つていたのを思い出し、ざつくりと日程だけを話すと、間髪を入れず諒解となつたのである。

(つづく)

風地蔵新聞

春のまちゼミ

原 由里子

2月頃、大垣の商店街で行われる「春のまちゼミ」のチラシが入っていました。第5回と書いてあります。春と秋の計2回行われているので、3年目のまちゼミのようです。そもそもまちゼミとは何かです。まちゼミは、商店街のお店の人が講師になつてくれる、アットホームな手作り講座で、普段ではなかなか知ることの出来ない知識を教えられるものです。

少人数制なので、より深いコミュニケーションが学べますが、裏を返せば早く申し込みますぐに埋まってしまうという事です。今回のまちゼミは、チェックしたのが遅くなり案の定、人気の講座はすべて満員になつていて、申し込みの段階で断られました。結局3つの講座だけ申し込みが出来ました。講座の内容は、だいたい5つに分類できます。まずは、食べるです。おいしい飲食をしながら、専門の技術を伝授する。この

タイプはダントツ人気があります。満員になります。次に、学です。各店の専門性を生かしたノウハウ、教養を学びます。3つめは、きれいです。キレイになる、美しく装う知識や技術を学びます。4つめは、健康です。健康に良い運動をしたり、体に良い知識を学びます。5つめは、つくるです。自分の手を使った物作りをします。私はキレイと健康の講座が、休みと会われないことが多く参加したことがないです。つくる講座は、今回のエコタワシをつくるで申し込みました。「手芸を全くしないです」と伝えると、

ある程度は手芸が出来る人じゃないと難しいと言われあきらめました。確かに、他の参加者に迷惑がかかるのもわかりませんが、対象者の所に「どなたでも」と書いてありました。取り方によってはウソ記載です。と言いなから参加できなかつたことにいじけているだえなんで酔が・・。申し込みの手順は、参加したい講座を選び、電話で申し込み、当日を迎えるという感じです。その講座によって異なりますが、講座の前日に主催者から電話がかかってくる。申し込みを忘れて、来ないのを防ぐためです。その通り、しつかり

連絡が来るのは、銀行や高級品を扱うお店です。前回のまちゼミと比べると、本当に少人数も少人数です。中には15人という講座もあります。3名、2名、1組と競争率が高くなるわけです。受講料はその講座も無料ですが、教材費は必要な講座もあります。今回、私が参加した講座は、十六銀行、補聴器の宝月堂、人形の石川です。次号からは、参加した講座を順番に書いていきます。おわり

ちよつと立ち話

ツクシ摘んできたよ。帰ったらはかまとつて食べよう。(七十代の男性)

このゴールデンウィークに白石ファミリィが風地蔵に里帰りしてみえます。ラドンちゃん産まれ、どんなパワフルの家族なのか、とても楽しみです。気をつけてきて下さい。大人が39度あるのは本当にえらいですよ。そして

肺炎、子どもも5年前19才の時プラズマ肺炎になり1週間熱と咳に苦しみ入院といわれ、自力で直すと薬だけもらって1週間かかったことを思い出します。奥田さんもう45才なんです。年齢を知ってビックリ。もっと若いかと思っていました。健康が一番ですよ。ね。

子ども頃「ツクシ食べたい」と言う「苦しい」と言われ、大人になってスーパのお総菜で食べてみたら美味しかったです。けど残念な話ですが、「苦しいものが美味しい」と思ったらそれは舌の老化だと製薬会社の人から聞いた話と

写真展の時の写真と、ケガをされて入院中に風地蔵へ電話をかけて下さった大女将さんの声で想像するしかないです。カフェへよくみえるお客様も、若い女の子が言った言葉で立ち直れなくなると言っていました。コーヒーの味を「おじさんのしぼった汁の味」と言ったそうです。注文する気無くさせます。(原)

社長が大垣にいらは時々古屋のブルノートというライブハウスと一緒に米良さんや福原美穂さんとか聴きにいらつきました。なつかしい。父も喘息だったので、父の症状を思い出しました。奥田さん無理しないで下さいね。40才過ぎるときかなりあります。50過ぎるともつとです。お互いに体は大事にしましょう。あまでうすさん、私も食べてみたいです。私ごとで、皆様にご心配とお心遣いを頂きました。本当にありがとうございました。(鎌澤)

きれいだっただけ...

大橋 美紀

4月16日、母と甥っ子と私の3人で、海津市にある国営木曾三川公園のチューリップ祭に行きました。午前中、家のことをしたかったので、母と甥っ子にはお昼頃来てもらい出発。昔子どもが小さいときに行ったときりです。20年ぶりでしょうか。母は2年前にお姉さんと行ったらしく、甥っ子は保育園の遠足で行ったことがあると教えてくれました。スムーズに行けば、1時間あれば着

いてしまう距離ですが、30分車を走らせたら、まったくと動かない渋滞。ラジオの交通渋滞でも流れていたぐらいです。何か、反対車線に出てUターンをしています。しかし道を替えても、どの道も渋滞。この日は夏日で25度にもなる日。車のエアコンの効きも悪く全く冷えない。ただの送風。渋滞なので窓を開けても風も入ってこない。それでもやっとな河川敷の駐車場に近づいた。その駐車場もいっぱい、出る車待ち。やっとな車を止められたのが15時を過ぎ

ていました。2時間半もかかったことになり。園内も人・人。チューリップよりも人が多い。子どもが遊べる遊具や芝もある。昔シートを敷いた覚えがある。今はカラフルな小さなテントが、しばのあつちこつちにたてている。そこで家族が時間を過ごしている。とにかく暑い日、色々なキツチンカーが来ていたのですが、氷やアイスのお店が列を作っていました。日陰にシートを敷き、色とりどりのチューリップを楽しみました。チューリップの資料館もあり、シューリッ

プの初めてを知りました。名前の由来は、16世紀トルコに駐在していた神聖ローマ帝国の大使がチューリップを見て「何の花」と訪ねたら、トルコ人は頭のターバンを指しながら「チューリパ(ターバン)のような形だ」と答え、大使はそれを名前だと思い、チューリップの語源になったそうです。1863年に日本にチューリップがやってきた。数も少なく、一部の上流階級の人々や外国人によって鑑賞され、大正時代から本格的に栽培が始まった。そのうで、労働者の1日の賃金が10銭、2

0銭の時代にチューリップの切り花は1本5銭もした。新潟や富山で米の裏作として栽培されたそうです。今では春になると各家のお庭や花壇で、チューリップを咲かせて楽しんで親しみやすい花となっています。閉園間際までたっぷりチューリップを楽しみ、17時30分に園をあとにしました。

